

カンボジアにおける日本文学の受容

Setharin, Penn / セタリン, ペン

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

73

(開始ページ / Start Page)

99

(終了ページ / End Page)

109

(発行年 / Year)

2006-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010126>

カンボジアにおける日本文学の受容

カンボジアといっても、皆さんあまり馴染みはないだろうと思います。北は中国、南はインド、その間にある小さい国の一つです。幸いアンコールワット遺跡だけは世界に知られています。そのくらい古い歴史、文明文化を持った国です。しかし古い文化ばかりが知られて、現在のことが何も知られていないのは残念です。

日本との関係で言えば、たとえばカポチャ（パンプキン）の語を広辞苑で引いていただくと「カンボジアから伝来した」云々と出ているはずですが、徳川家康の朱印船以来の通商関係があり、一時期にはポニヤール（首都プノンペンから二五キロくらいのところにある港町）に日本人町があつたような時代もありました。オランダ、ポルトガル、中国人が多かつた中で日本人も数百人いたとされています。しかしこれも江戸幕府の鎖国政策が強まり、朱印船が廃止になると共に減びてしまいました。ただ、一つだけ歴史的なエピソードを紹介しておきますと、

ペン・セタリン

一七世紀の初め、三代將軍家光の命によって、大通辞鹿野兼了がオランダ船に乗ってカンボジアを訪れたことがあります。彼はアンコールワットに詣でてそのスケッチを持ち帰りましたが、それが「祇園精舎の図」として今も水戸の彰考館に残されています。日本では、アンコールワット遺跡が祇園精舎だと長く信じられてきたので、ほかにもアンコールワット詣りをした日本人の記録がいくつもあります。

カンボジアと日本との交流といえば、この後はいきなり太平洋戦争時代、つまり日本軍の進駐になつてしまいます。しかし戦争の話はあまりしたくありません。第一次世界大戦後のドイツの戦争賠償金負担のための経済的困窮がナチスドイツを生んだことを知るシハヌーク元首は、日本への戦争賠償を放棄しましたが、彼は親日派なのです。それで、ポルポト以後、日本はカンボジアへの経済援助をし、カンボジアからの留学生をたくさん受け入れています。

さて、今日は「カンボジアにおける日本文学の受容」というテーマでお話するように命じられました。今カンボジアで日本文学がどんなふうに入られれているか、それは後ほど具体的な例をいくつか紹介しますが、それを聞いて皆さんはさぞ驚かれるのではないかと思います。

まず「受容」ということばですが、日本ではたとえばモーパッサンでもドストエフスキーでもジョイスでも、それらが翻訳され読まれ、その影響を受けた作品も書かれています。そういうことを「受容」というのだとすると、カンボジアにおける日本文学はまだ、やっと読まれ始めたばかりですから、いわば「受容」以前かもしれない。それで今日は、カンボジアでの日本文学事情を紹介する前に、まずはカンボジアの文学事情そのものについて簡単にお話するところから始めたいと思います。

と言っても、ここでも先ず初めに、実は現在のところカンボジアの文学を全体的、体系的に通観した、いわゆる文学史のよなもの、書物として多くはないという事実から始めなければなりません。碑文の研究や『ジャータカ物語』など仏教文学に類するものの個々の研究はもちろんありますが、それらを歴史的に位置づけたり、体系立てたりした書物は一九七〇年代に盛んに書かれましたが、国内が混乱に落ちた一九七五年から一九九〇年の間何も進展がなく、ここ一〇数年、外国にとくにフランスに住んでいるカンボジア人学者が外国での研究成果を外国語で発表し、同時に書物として国内に出版し、やっとカンボジア文学も歴史的、体系的な書物が生まれたのです。日本から見れば、まずそのことに驚かれると思いますが、それが実情で

す。学校教育の中でも、むしろ文学作品はさまざまに取り上げられています。リセー（中学―高等学校）での学習の様式としては、前期と後期において、それぞれ教育カリキュラムで決まった一つの文学作品が読まれます。学年順として、現代から始まって次第に古いものに、古典に入ってゆくというような体系ではありませんが内容の易しいものから難しいものに進むのです。というのは、碑文または貝葉（貝葉、後述）から紙の印刷に移ったとき、古代語から現代語に書き変えられるのです。カンボジア語の学習時間が上の学年に上がるにつれて、減っていき、フランス語に取って代わります。週に五時間以内のカンボジア語の時間において、詩若しくは文学作品としての批評、書かれた時代背景（習慣や宗教）に沿ってアツプローチし、文学上の技巧や登場人物の長所、欠点を探し出し、物語からどんな生き方が取り組まれるかわゆるモラル中心、生き方の術中心の作品分析であります。

以下にお話することは一般の通用概念ではありませんが、また私の個人的な判断や解釈でもあります。

カンボジアでは文学を歴史的に語るときは、大まかに「古代文学」「中世文学」「近・現代文学」と分けています。そのほかに「古典文学」という言い方もします。これは後にまた説明しますが、必ずしも「古代文学」と「中世文学」を一括した呼称というだけではありません。以下ではそれらについて簡単に紹介します。

(1) 古代文学

「古代文学」は銅版や宮殿の石壁や宝石に刻まれたり、動物(水牛)の皮や竹簡(竹製の短冊)、貝葉などに書かれていた。それらはサンスクリット語やカンボジア語で書かれたもの、また両方のことばで書かれたものもあります。水牛の皮や貝葉に書かれたものは長くても百年しか保存が利かないことや、度々の戦火その他によつてほとんどは失われてしまいました。

最も豊かなのは碑文で、前アンコール時代(二世紀～八世紀)からアンコール時代(九世紀～一四世紀)までに集中していますが、現在タイ、ラオスやベトナム領に散らばっているものもふくめて一一五〇種の碑文作品が確認されています。そのなかで最も古いものはヴォカーニユ(現在ベトナム・ニャチャン)碑文であり、三世紀頃にサンスクリット語で書かれ、スレイ・リアミア王は次代王に仏教を信じ、困った人々に施しをするようにというメッセージ文です。六世紀に書かれた碑文の中にはインドの叙事詩『ラーマヤナ』をもとにした『リアムケー』があります。またアンコールワットを立てたスリヤヴァルマン二世の時代(八〇二年～八三四年)の『宣誓書』も、文学的なものとして知られています。その他ジャヤヴァルマン七世(一一八一～一二一八)の王妃であるインドラデーヴィーは仏教学者でありましたが、彼女の作になる詩が多く碑文として残っています。

(2) 中世文学

カンボジアの中世文学は古代と現代の中間を意味し、一五世紀から一九世紀の間に書かれた作品をいいます。また古代の碑

文から貝葉(サストラ、スートラ)に書き写された作品もこの時代に現れ、大に行なわれました。貝葉とはルット(インドでは多羅、棕櫚に似た木)の葉に鉄筆で文字を彫り、墨を流し込んで乾かしたもので、僧侶の教育用に使われたものですが、寺院では今も使われております。私の手持ちのものを一部勝又先生にさしあげましたが、サストラ独特の丸クメール文字(カンボジア文字)で書かれ、その作りは中国の竹簡と同じだと面白がっておられました。

中世文学はジャータカ物語が主流ですが、中では五五〇話の最後の一〇話『トッサ・チャドク』や『パンニアツサ・チャドク』がよく知られております。『パンニアツサ・チャドク』は、一五世紀から一七世紀にかけてスリランカに留学したカンボジア、ラオス、タイ、ビルマの僧侶たちが伝えた物語集ですが、四方国に共通した話であれば、違ったものもあります。『トッサ・チャドク』の中でもカンボジア人が好きな話は『モハーヴェーサンドー・チャドク』や『ソヴァンナサム・チャドク』です。前者は「布施太子物語(ヴェサンダラー王子物語)」で、全財産を人々に喜捨し、最後には愛する妻子も喜捨してしまう物語です。後者『ソヴァンナサム・チャドク』は「孝行王子物語(サーマー・ジャータカ)」で、孝行息子が盲目の両親に仕える話です。

これら主に貝葉文学は社会が比較的平安であったフランスの植民地時代に盛んに集められ保存されましたが、どんなものが含まれるのか、それらの全貌はまだ解明されていません。ほとんどが寺院に伝わったもので、分かっているものは、仏教的

な説話類や王家の歴史、国の法律書、寺院や家の建て方(風水)や家訓や医学(マッサージ、薬草サウナー)や易学や陰陽や宇宙学や遊び、言葉遊び、なぞなどが主流です。ついでに申しますと、フランス植民地時代には印刷施設ができ、紙による書物が一般化しますが、寺院は初め貝葉文学を紙に印刷することに抵抗していました。しかし、できてしまうとそれによって却って仏教説話がより民衆に普及した事実も否定できません。

(3) 古典文学

碑文から貝葉に写されたものから、一五世紀から一九世紀初めまでに書かれた作品をまとめて古典文学とも呼びます。これは高等教育の場で、フランス植民地時代にはフランス文学一辺倒であったものが、一九五四年の独立後、意識的に民族文学を取り入れたことからこう呼ばれるようになった歴史があります。古典文学の特徴は、僧侶や王族、その側近によって書かれた作品が主流ですが、パリーリ語やサンスクリット語が多く使われています。インドの『ラーマヤナ』を基にした『リエムケ』(リエム王子物語)は、現在残っているのは一七、一八世紀に編集された全八〇巻のうち第一から第一〇巻までと、一八、一九世紀に編集された第七五から第八〇巻までです。作者は不明ですが、原典の『ラーマヤナ』の神格化されたラーマ王子とはずいぶん性格が変わって、人間的な情感豊かな人物として描かれています。フランス在住のカンボジア学者であるサヴロス・レヴィッツ教授は、『リエムケ』は仏教文学であり、カンボジア独自の文学になっていると言っています。

古典文学を代表する作者の一人は、アンコール・トム遺跡群

の建立や大乘仏教を取り入れたジャヤヴァルマン七世の妃で、当時の大学の学長でもあったインドラデーヴィーです。夫である国王への頌歌、亡き妹への慰霊詩が主ですが、彼女の名を冠した国家的な文学賞がシハヌーク国王時代に作られました。そして、一九世紀の初めに国王としてカンボジアを治めたアンドン王(一七九六年〜一八五九年)や王の側近であるサントーモック、ウツク、ゴーン、プロム、ベッチ、トン、ノーン、マエン、イアエム、サム・アート、スレイ、ヒンやクオイなどがあります。彼らの作品のほとんどはジャータカ物語を題材にしていますが、それは日本の「今昔物語」を素材にした芥川龍之介や谷崎潤一郎の仕事になぞらえられるものです。これらの中でクオイは、中国系カンボジア人ですが、両親や祖父母から聞いた中国古典文学をカンボジア語で書きました。クオイの前に、一八世紀の終わりごろに書かれ、作者不明の『孔子とチョー・トク(子路?)物語』もフランスで見つかりました。

(4) 近・現代文学

代表的な近代文学の作者には、ノパロアット殿下、テイエン大師、パン大師、カエウ、ゴイなどがいます。彼らの作品もほとんどはジャータカ物語を題材にしています。

またゴイはサイディオ(吟遊詩人)でしたが、彼の語りはカンボジアだけに留まらず、隣国タイの王室からも呼ばれるほどの人気がありました。彼の家訓的な文学は、当時の国立図書館長であったフランス人のカベレス女史によって筆録され、現在もカンボジア人に愛されています。ゴイは一八六五年の生まれで一九三六年に没しましたが、最後の吟遊詩人だといつてよ

いかかもしれません。そして彼までのカンボジア文学は、大まかに言えば農民の生き様、知恵を歌うものだといえます。

この後、皆さんには全くお馴染みはないでしょうから、いちいち名をあげることはしませんが、現代作家といえる人は国内外、百人を超えるほどの人がいます。これらの人たちについても大まかに言えば、仏教の影響が強くなりますが、フランスの教育を受けているところが大きく違ってきます。彼らは植民地政策がもたらした官僚的風潮を排除し、希望に満ちた新しい社会を描こうとしています。知識人に直接訴える作品も出現し、中ではケン・ワン・サククやコイ・サルンは風刺的な詩でカリスマ的な人気のある現代作家です。また一九九三年の総選挙後、作家協会が復活し、国内外の作家による文学復興運動が盛んになりました。いま国内で活躍している代表的な作家には、ユオック・クン、マウ・サムナン、パル・ヴァンナリレアクなどがいます。彼らの文学の特徴としては、ポルポト政権下の苦難に満ちた生活の記録や回想、またその後の奮闘や社会奉仕活動を描き、国民の相互扶助を訴える作品が大勢を占めています。

以上がおよその現代のカンボジア文学事情ですが、次は見方を少し変えて、カンボジアにおける外国文学受容の実態についてごく大まかに触れておきたいと思えます。

A 中国文学

カンボジアはインドと中国には生まれたインドシナに属しますが、今までの話でもお分かりの通り、インドの影響は宗教と結びついてカンボジアの文学に深く根付いています。一方、

中国の影響は一九世紀も後半からにすぎません。先に触れた中国系カンボジア人を両親に持つクオイ（タン・テウーチ）が珍しい例ですが、彼には中国が背景となっている『チャウ・クン姫物語』『テク・チェン』などがあります。他にも作者不明ながら『サイハン』『ハンブン』『ラオチャ』『シシインクイ』などはすべて中国ものといつてよい作品です。また『三国志』などはフランス植民地時代に入っていました。『西遊記』が訳されたのは一九六〇年です。続いて六六年に『魯迅作品集』が翻訳出版されました。

特筆すべきは一九六九年から七五年の間、『杜子春』を始め、中国古典小説が次々と翻訳され、新聞連載されて、女性や自然の美しさやストーリーの面白さで学生の人気を博したことがあります。やがて弾圧によって新聞社が次々と消えてゆきました。その後中国小説自体は単独に出版されるなど、勢いはしばらく続きました。

B フランスとヨーロッパの文学

植民地時代に高等教育のカリキュラムに組み込まれていましたから、モリエールやコルネーユ、モーパッサン、マルローなど、英文ではシエイクスピアなどを原文で読まされました。上げて行けばさまざまなものがありますが、要するに教科書としての普及ということになります。

C 日本文学

日本との文化交流は大きくポルポト以前と以後とに分けられますが、そうはいっても一九七五年のポルポト鎮国政策以前の文化交流はいかにも表層的なものでした。日本映画（座頭市や

原節子主演の大衆的なものでしたが、私自身も、子供ながらその原節子や原節子のいる日本に憧れた一人です）が入ってきて、一時は女学生の間でニックネームに日本名をつけるような流行もありました。その頃柔道や空手も入ってきて、カンボジア人が始めてキモノ、オビ、タタミ、レイ（礼）というような日本文化に触れましたが、日本語教室も一九六五年頃に初めて開かれました。

前にも触れたようにシハヌーク元首は親日派ですから、国立芸術大学にカンボジア在住の日本人ヌオン・川村礼子氏を招いて日本舞踊の指導を依頼するようなこともありました。

また、同大学の演劇学部の学部長で戯曲作家でもあるヌオン・カン教授はカンボジアの古典舞踊と日本の能との関連に興味を抱き研究し、一九七五年に日本の国際交流基金によって一年間東京に滞在、能を中心に日本文化の研究を続けました。ところがその年まさにポルポト鎖国政策が始まって帰国できず、やむなくアメリカに亡命、ポルポト政権崩壊後、一時はカンボジアに戻って国立芸術大学で教鞭もとりましたが、再びアメリカに帰り、そこで亡くなりました。彼はカンボジアで、日本の『鶴の恩返し』を戯曲に仕立てて学生たちに教えました。いまそれを継ぐものはいません。

このポルポト鎖国政策時代の四年間はカンボジア社会のあらゆる成長発展を停止させた時期です。文化面においてもカンボジア文化そのものが否定され、破壊されました。知識人たちにとっては、中国古代の焚書坑儒にも似た暗黒の時代で、さまざま悲惨と損失がありました。

一九七九年のポルポト政権崩壊後が、やっと日本との文化交流が本式に始まったといえると思います。一九九一年に「東南アジア文化支援プロジェクト」(CAPSEA)が設立されました。CAPSEAは日本人によって書かれた愛と平和に関する児童文学や日本文学を翻訳提供する唯一の国際NGOです。プノンペン市内にCAPSEAの事務所兼図書館を設置し、周辺の地域をワゴン車で巡回して、子供たちや村人に閲覧、また朗読して聞かせています。それに力を得た私も、その一端に加わって日本文学を翻訳しています。

まず政治色に傾いていたカンボジアの国語教科書を「イデオロギーなしの教科書作り、憎しみの代わりに愛情と平和のテキストを」というスローガンの下に小学校低学年用副読本を作り、全国の小学校に無料配布を始めました。ポルポト時代には親子の愛や信頼さえ断ち切られました。子供たちに人間への信頼や愛情を育もうという目的から、日本の一年生の国語教科書から、岡信子の『花の道』や『おむすびころりん』、また高橋宏幸の『チユロスツプのきつね』や新美南吉の『手袋を買いに』『ごん狐』、長田力の『胴長タック』、野坂昭如の『火垂るの墓』など、日本の児童文学を翻訳しました。

成人向けとしては、今までに森岡外『高瀬舟』『山椒大夫』『最後の一句』『杯』、泉鏡花『夜叉が池』『高野聖』、芥川龍之介『杜子春』『鼻』『仙人』『芋粥』、菊池寛『恩讐の彼方に』、中島敦『山月記』『李陵』『名人伝』、上林暁の『小便小僧』、尾崎一雄の『暢気眼鏡』などを訳しました。これらは、いずれも日本の文学作品がカンボジア語になった最初の例です。これら日本文

学の反響は大きく、ブノンペン大学は一昨年より、アジア文学部(主に日本文学)を設け、それらの翻訳本を学生に教えた。作家協会もいくつかの作品を取り上げ、テキスト・ブックにしています。読んだ教師、学生、作家、僧侶、政治家、また、たくさんの庶民から感想文が寄せられました。彼らは日本の文学に接するのは初めてですが、物語の中に見られる倫理道徳観に触れて、安心し、また心が広くなったとも言います。先ほど、今も寺院を中心に生きて人々に働きかけている貝葉文学のことを申しましたが、これらから紙に印刷するようになった書物には、たとえば女性たちの美しさや恋愛の描写などは削除されているのが慣わしです。それは先ず僧侶たちの心を揺さぶつてはならないからです。そうした規制によって、古い物語も一面では聖典の役割を果たすことになりました。美しい古典文学は詩で書かれているため、原文で読むカンボジアが現在少なく、民衆の多くは文学というものをそんなものとして理解しています。そうした文学環境の中に混じってゆく日本文学のことを想像してみてください。

以下にはカンボジアでの反響例をいくつか具体的に見ていただきますが、いずれも、作品から倫理を、生き方の指針を読み取っていることがお分かりいただけると思います。

先ほど少し触れましたヌオン・カン教授、カンボジア芸術大学演劇部の学部長で、戯曲作者であり、日本の能を研究した人ですが、彼が私の訳した泉鏡花の『高野聖』『夜叉が池』にそれぞれ解説的序文を寄せてくれましたが、以下に、少し長くなりますが、そこから抜粋します。文学史的なことその他、細か

なところには誤りもありますが、このあたりが、カンボジアで文学も日本のことも分かる教養人、知識人の理解、見方を代表すると思うからです。

まず『高野聖』から。

このような「天才的な作品」である「高野聖」に批評を書くのは骨の折れる思いである。作品のあらゆる角度に鏡花の才能が現れているから、あれもこれも言わねばならぬと、気持が混乱する。

しかし、ここでは重要な点だけを選び、述べることにしよう。

物語は、ある聖と俗人との出会いから始まっている。この聖は尊大な様子で、まわりのものに、関心を示さないようにみえる。一見するところ、僧侶というより、芸術家のようである。だが、俗人の乞いによって、聖の修行生活と迷いについての話が打ち明けられてゆく。……

物語の途中、聖のことが印象的である。「お経だけでは、人を救うことはできない」ということばである。これは、聖の反省、自分を叱る良心の声なのだろう。確かに、その頃の聖はまだ若く、「修業中の身」であり、世の中には怖いことがたくさんあり、憎む心もあった。

物語は仏教僧の修行・試練を文学的に表現している。気持悪いものを気持悪く、また美しいものを美しく描いている。聖は「修行の旅は自分を一人の僧にしてくれた」と言っているが、謙遜なことばである。「僧侶であること」と「煩

悩の俗人」であることとの、命を掛けた闘いであり、大げさに言えば、「涅槃への道」と「煩惱」との闘いについて述べた物語である。「六明寺」の住職であり、説法にすぐれた僧として知られる現在に至るまで、聖は多くの試練を潜り抜けてきた。地獄の試練、人間世界の試練を、すべて打ち克つてきた聖の修行物語である。

ご覧のように、『高野聖』の、とりわけ主人公の修行僧としての側面が強く押し出されていることがお分かりいただけるでしょう。日本の泉鏡花研究の上に何かを付け加えるような意見批評というわけには行かないと思いますが、また、特に誤った読みかたというわけでもない、と言えばよいでしょうか。

次に『夜叉が池』についての解説から引きます。

泉鏡花の日本の戯曲「夜叉が池」に触れたのは初めてである。

はじめは、「珍しい書き方の作品」に触れたというのが正直な気持だった。もう少し、作品世界に入ってゆくと、登場人物たちの会話は自然であり、日常聞いたような会話である。つまり不自然さや「わざとらしさ」が見られないのである。これは、自然主義の会話とも思えない。なぜかというところ、「美」があるからだ、もっと細かいところに入ると、私たち読者の眼中には「鐘」が見えてくる。この鐘は「人間と竜神との約束の鐘」である。村に伝わった伝説によると、昔、人間は水と戦っていた。そしてこの里が減び

ようとしたとき、越の大徳泰澄おほとくたいじやうが行力で竜神を池に封じ込めた。そこで竜神が言うには、村人のために自由を奪われるのは是非に及ばない。その代わりに鐘を造り、昼夜三度ずつ撞き、この約束を思い出させよ、と。……

なんと、この鐘は「人間と別世界のものとの約束の鐘」なのだ。弥太兵衛爺様は約束を守って五〇年間、一日も欠かさず鐘を撞いてきた。その死が迫っても、村人のためにその任務を守り通した。そして、たまたま弥太兵衛爺の臨終に立ち会うことになった東京の学生「晃」は、老人の意志をついで鐘を撞く約束をする。晃はすべてを犠牲にして村に住み着き、老人との約束を守った。このような慈悲深いところに読者は感動せずにはいられないのである。……

泉鏡花の文学には多様な人物が登場する。村人、村長、お寺の住職、教師、相撲の力士などがいるが、動物も牛を始め池の中の生き物からさまざまな化け物、異世界の住人である「白雪」や「万年姥」というものまで現れる。同時に我々は「白雪」と「百合」の運命が次第に重なってくることを、犬の遠吠えや鶴の鳴声など、自然界の暗黙の合唱という音楽の中に聞き取ることになる。それらは作家の広大な想像世界を思わせる。

このように豊かな登場人物や、自然の中のテレパシーのような手段によってそれらの人・モノたちがお互いにつながりあっていることが暗示され、最後の場面、あの世での白雪と晃・百合の勝利を暗示して終わる。作者泉鏡花の特別な美意識を示した「芝居」である「夜叉が池」は、いま

ヨーロッパ、特にフランスの最近の演劇界が模索する「総合演劇」(theatre total)に相当するであろう。

ヌオン・カン教授は演劇を研究し、ご自分でも戯曲を書く人ですが、現代劇である『夜叉が池』の、いわゆる魑魅魍魎の登場する世界とそれらのものが人間より、モラルが高いところに格別ひきつけられたのだと思います。

先ほど、こうした読み方が日本文学研究に何かを付け加えるものではないであろうと申しましたが、旧ポルポト派地域で翻訳本を配ってくださっている吉川浩さんがこんなことを伝えてくれました。ある村の老人が『山椒大夫』を読んで、安寿が烙印を受ける場面では仏像が身代わりになってくれたところが嬉しかったが、また、「私は勘違いをしていました。プノンペンに住民はみんなアメリカやベトナムに魂を売ったのだと聞いていました。この安寿や厨子王のように、山椒大夫のところにおいても山椒大夫を許しているわけではない、ということもあるのです」と語ったというのです。これを、もし森鴎外が聞いたら、私も一生日本の陸軍の官僚組織の中にいましたが、国家に魂を売ったわけではないのですよ、と言ったかもしれない。そんなふうには想像することはできませんでしょうか。

次は元ポルポト派幹部だった人ですが、わざわざ日本にいる私に手紙を書いてくれました。その一部を紹介します。

「恩讐の彼方に」を読む前は、私は仏教や信仰は社会の発展を遅らせる要因であると思っていました。しかし、こ

の本と出会った今、感動し、仏教は人に安心と力を与えることを知りました。毛沢東を崇拜した私は大きな間違いを犯しました。現在は大変高齢になっておりますが、死ぬ前によい本に出会い、改心することができて、救われる気持ちです。国際法廷でも何でも出頭して早く裁いてもらい、費用が余ったらそのお金をカンボジア国民のために使ってほしいと思つてます。

また、同じような、しかし別の人の、こんな手紙もあります。

再びお手紙をさしあげることをお許しください。菊池寛の「恩讐の彼方に」を読んで、いてもたつてもいられず、感想を述べさせていただきます。今は菊池寛さんにお会いして懺悔したい気持ちでいっぱいです。私はカンボジアの現状を見て絶望し、また再びトラになって現政府に対抗しようと思ったことが何度もあります。しかし、「恩讐の彼方に」を読んで、全く逆の気持ちが生まれました。国民を少しでも幸せにするためには戦いではなく、生産を指導しようと思心しました。それからマライではアスパラガスや枝豆を栽培し、植林の指導もしました。既に九〇本の木を日本のボランティアの人たちと一緒に植えました。私は、中国と出会う前に日本と出会っていたら、カンボジアは不幸にならなかったと思います。私の枕元にはいつも中島敦の作品集と「恩讐の彼方に」を置いています。悲しいとき、問題のあるときはいつも取り出して読みます。これからもみま

もってください（後略）。

文学作品がまるで宗教書のように読まれていることに皆さんは驚かれると思いますが、そしてこれは、現在のカンボジアの政治情勢、文化状況のしからしむところであるのですが、しかし、文学作品が本来持った力を率直に、素朴に見せている、とはいえないでしょうか。ポリネシアの人々を愛した中島敦が聞いたら、ここにこそ、現代人が忘れていた文学の本当の存在意義がある、と喜んでくれるのではないかと想像してしまいます。いま世界には文学についての複雑な理論と細密な研究とがたくさんありますが、どんな高級な理論も、この、もとポルポト軍人、一人のマライ群長の素朴な感動を否定することはできないと思います。

プノンベンの国立博物館には七世紀に作られた二体の神像があります。戦争と勝利の女神ドウルガーとハリハラ神像です。ヒンズー神の名が付けられていますが、カンボジアではクメールの神であり、クメールの男女がモデルだと信じられています。この女性のトルソーは、しばしばシロのヴィーナスより遙かに素晴らしい傑作だといわれる彫刻ですが、こうした文化を持つカンボジアですから、やがて文学においても世界に誇る傑作を生み出せないはずはないと、私は信じています。

一九九三年の総選挙後、カンボジアは安定しつつあります。新たな国づくりのために、まず人材の育成からということになり、日本はカンボジアからの留学生をたくさん受け入れるようになったことは前にも申しました。その他、特に技術面が主です

が、法律、保険、教育などの分野にも専門家を日本から多数派遣しています。そうしたなかで、プノンペン大学から日本の上智大学に留学し、日本文学を学んだ女性留学生オム・ラヴィーさんは二〇〇一年に帰国し、現在プノンペン大学で日本文学を教えています。研究費が充分でないようなことがあって、新しい翻訳や研究にまで手が届いてはいないようですが、彼女を中心に、プノンペン大学内に日本センターを開設するべく準備中で、二〇〇六年二月にはオープンする予定になっております。その日本センターがどのような「国際日本学」をカンボジアおよび世界にもたらすか、期待していますが、法政大学の支援も是非お願いしたいところです。

(注) Khing Hoc Dy の作品

Khing Hoc Dy *Anthologie De La Literature Khmère Du XI*

Xème Siècle. Phnom Penh

Khing Hoc Dy *Appercu Generale sur La Literature Khmère*

L'Harmattan, Paris

Khing Hoc Dy *Ecrivains et expressions litteraires du Cambodge*

au XXème siècle. L'Harmattan, Paris

参考文献

Nepote Jacques and Khing Hoc Dy "Chinese Literary Influence

on Cambodia in the 19th and 20th century". In Claudine SALM

ON (ed), *Literary Migrations, Traditional Chinese Fiction in Asia*

(17-20 th. centuries). Beijing: International Culture Publishing

Corporation, 1987, p.321-372

Ren é DE BERVYAL, *Direction Presence Du Bouddhisme, France*
-Asie, Saigon 1959

(この原稿は二〇〇五年七月一六日、国文学会大会でお話した
ものに手を加えたものです。)

(PENN, Setharin・国際日本学インスティテュート博士後期
課程二年)